

日記

高橋 たか子

感を抱く一方で、時空を隔てたジュリアン・グリーンやレオン・ブローアの文章と対話する。夾(きょう)雑物を退けた読書と思索の生活を送りながら、ときおり窓の外の小さな風景を愛でる。こんな日々の過ごし方をわれわれは忘れてどれくらいになるだろう。本書を読んでいる間だけは、そんな静かな時間が流れる気がする。

(講談社・一九九五年)

著者は作家、一九三三年京都府生まれ。

【評】清水 良典(文芸評論家)

阿部 珠理著



「与えつくし」など汎インディアン文化創造の運動とは響き合って先住民再生を導くばかりか、その生命共生の思想は、人類全体の未来にとって希望の灯と言える。

サウスダコタ州のスー族保留地に通い出して十五年という著者の取り組みの総決算と呼ぶにふさわしい、しかも読み物としても楽しめる秀作である。(角川書店・二九四〇円)

著者は立教大教授、福岡市と生まれ。

【評】栗原 彬(明治大教授)

楽

「光源氏」「六条御息所(ろくじょうのみやすどころ)」「夕顔」

王朝文学の研究者である上原作和さんは、源氏物語の主な登場人物を一人ずつ一巻で解説していく、全二十巻のシリーズ「人物で読む『源氏物語』」の編集、執筆に取り組んでいる。来年秋まで四

1人を1冊で解説 全20巻

また、かつては「作中人物論は、好き嫌いのレベルで論じられがち」として敬遠する傾向もあったとか。だが、源氏物語を漫画化した「あさきゆめみし」を読んで原典に興味を抱く人が八割といわれる昨今、キャラクターごとの切り方は自然な感じがする。

「特に、音楽関係の記述には、自信を持っている」という。源氏物語では、登場人物のキャラクターを特徴づける要素の一つが楽器で、人物ごとに奏でる楽器が違つた。光源氏は、七絃琴(しちげんきん)(古琴)の名手という設定。物語の随所に琴の記述があり、「若



【うへはら・さくかず】1962年佐久市生まれ。編著書に「古典講読 源氏物語・大鏡の研究」など。

読書

上原 作和さん

期にわたり、五巻ずつ刊行されていく。

上原さんは、各巻に収録された登場人物に関する原文の注釈、紫式部に関する論文を書くだけでなく、さまざまなアイデアをシリーズのあちこちにちりばめ、収録論文の選択もするまとめ役。

「論文執筆は、友人みんなにお願いした。それを含め、三十一四十代の主な源氏物語研究者は、何らかの形で関係していますよ」

若い世代の研究者が中心なので、古い論文でよく見られた男性規範が反映したような「貞淑な」「奔放な」などの文句で表される女性観が出てこないという。

■「人物で読む『源氏物語』」

「格の高い楽器だったが、紫式部の時代には既に演奏されていなかったらしい。こうした面から紫式部は、琴学の造詣や思いがかなり深かったと察せられます」

数年前から、自らも七絃琴の練習を続けている。「潑刺(はつらつ)」「按摩(あんま)」という言葉は、七絃琴の奏法に由来するらしいとか。

「これが終わったら、しばらく源氏物語はお休みにしたい。でもいづれ、源氏全巻の注釈書に挑むつもりもあります」

(勉誠出版・各巻三九九〇円)

文庫

■瀬戸内寂聴著 内寂聴の源氏物語 源氏物語の現代手がけた著者が、帖のうちに重要な

を選び、平易な略に書き換えていく。作の概略を知るのに適だが、ダイジェツとしても完成され読みごたえがある(講談社文庫・七

■池永陽著「二・ララバイ」 幹郎は、幼い身

けて妻までも交差して失い、傷ついたまま生きていく。彼

ルネ・ラリ

薄い衣を身にま



■異文化体験記 底抜けに親切な人びと

阿部 紘久著

一九八〇年代に日本の繊維からはなかなか分りにくい会社から韓国に赴任した著者

■リリイ、はちみつ色の夏

スー・モンク・キッド著、小川高義訳

冷酷な父親の暴力を受けて